

水女史特別出演、盛会であった。月下の陣！加賀谷豊、飯田正雄、小松盛治、菅公一、船木富美、渡辺久子、村上安、紅葉狩、佐藤道水、西郷隆盛、加藤快水、別れの盃、佐々木美水、異国の丘、船木瀧水、常盤御前、高井新水、吉野山(録音)、故新開領水、乃木將軍、保坂遯水、井伊大老、竹内信水、秋は逝く、秋田支部長星野瀧水、小栗栖、鶴岡辻有水、羅生門、新瀧加藤陽水、筆の口、秋田佐藤烈水、本能寺、東京松岡遊水。外に詩吟九番。

正派薩摩琵琶第二回八戸大会

九月二十三日(休)午前十一時一午後三時半八戸市公民館大ホール、主催八戸薩摩琵琶研究会、指南最上穂洲氏。琵琶会としてはこれまであまり例を見ないほどの立派なプログラムで巻頭に青森県知事外二氏の挨拶文を掲げ地元八戸市をはじめ各地の琵琶、詩吟の名手出演で充実した演奏会、盛会を極めた。詩吟：月館雄岳、同、神研岳、日舞、佐藤瑞子、外一名、菅公一、東京八束一峰、尺八、等、尺八、中平外一名、等、菊美沙外三名、詩吟：森川幸悦、異国の丘、明桃館佐藤森水、詩吟：石田勝仙、嵐流島、弘前中村光水、平尾鷹水、福島光峰、花の教、遠野太田稔幸、詩吟：柴野和加子、常陸丸、東京仲川秀邦、古曲弾法合奏：東京一峰、仙舟、秀邦、嵐舟、岳瑞、詩吟：音喜多松風、彰義隊、東京本橋仙舟、光秀の最期、会主最上穂洲、城山、東京清川嵐舟、乃木將軍、東京軽部岳瑞。

ラヂオ・テレビ琵琶放送

○：八月二十一日(休)午後三時十分NHK・FMラヂオ「琵琶五面」による、「水四見」鶴田錦史女史ほか。
○：九月一日(火)午前八時半及び二日(水)午後五

時NHK教育テレビ岡部錦蝶女史(創設者)。
○：九月十日(休)午後三時十分NHK・FMラヂオ「盛綱先陣」木原綾子女史。
○：九月十日(休)午後七時半NHK教育テレビ「邦楽廻り舞台」新作天祥山上(菅公)中村旭園女史。

菅野有水氏 七月十九日逝去、享年七十五。(岩沼市早股字前川一八七)

野田杉水氏 八月八日逝去、享年八十五。(近江八幡市正神町十番地)

右謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

予告

- ：筑前琵琶橋会全国大会 十月四日(日)広島市中国新聞社講堂。
- ：都派琵琶秋の公演 十月九日(金)午後五時東京日本橋第一証券ホール、主催錦穂後援会。
- ：京都琵琶協会十月例会 十月十一日(日)午後二時本部平井会長宅。
- ：錦心流一水会仙台支部秋季演奏会 十月十一日(日)。
- ：青壮年琵琶演奏会 十月十八日(日)正午東京港区赤坂公会堂(港区役所赤坂支所二階)、主催尾崎三郎氏。青壮年七氏の外押川旭葉、杉山旗水、座間綾水、軽部岳瑞など十二氏出演。外に吟詠十題、尺八一名。
- ：筑前琵琶橋会全国大会 十月二十四、五両日(日)東京大手町農協ホール。
- ：琵琶と詩吟詩舞の会 十月二十五日(日)午前十一時西宮市夙川公民館、主催蓮水会。故松野紫雲顧問の追悼を兼ね故人の作詞を主にした演奏会で会員の外琵琶部では大阪

中山鳳水、同小川吟水、京都平井春嶺、彦根林田旭城各氏来賓出演。尚会主三浦蓮水女史は「楊貴妃」を演奏。
○：第二回水藤五朗琵琶演奏会 十一月四日(水)午後六時半東京日本橋第一証券ホール、主催錦琵琶本部。
○：各派合同琵琶演奏会 十一月八日(日)正午京都東山安井金比羅会館、主催京都琵琶協会。
○：琵琶まつり木原綾子演奏会 十一月二十三日(休)正午東京茅場町東京証券ホール。

きごとあ

涼秋十月、暑からず寒からずの一年中で一番よい季節である。虫時雨、草むらにすだく虫の音は時雨の降るような気分になせられる。琵琶界も十月から十一月にかけてが活躍の最も盛んな時機で、演奏会など各地で開催される。演奏会といえ最近では時代の流れに抗し切れず大抵の場合一曲十五分が限度となっているため「中抜き」を余儀なくさせられる。このため熱心な琵琶ファンは聴客から一抹の物足りなさを感じる声を時たま耳にする。そこで一つの方法として中抜きをせずに一曲を上下に分けて二人で演奏すれば歌詞の真髄が徹底する。筆者も一两年前「竜の口」を錦心流と筑前の二人で全文を上下で分奏して好評を博した経験があるので敢えてこの機会に提唱する次第。

昭和五十六年十月一日発行(非売品)
編集者 植村 真水
発行所 京 絃 社
吹田市山田東一丁目三番地B六
電話 〇六(八七五) 〇三二六番

琵琶 機関紙

京

絃

第三二八号 京 絃 社

四 絃 漫 筆

(三) 琵琶振興の論

最近待望の山崎光椽(旭萃)先生の琵琶のレコードを手に入れることができた。実は昨年五月、神戸市で行われた日本琵琶楽協会関西支部の演奏会あとの反省会の席上で、私は山崎・柴田旭堂両先生から琵琶について色々とお話を聞き、山崎先生には琵琶教本をおねだりし、柴田先生からは「薩摩は薩摩の琵琶をおやりになったら」とおすすすめを受け、その後山崎先生からは約束された教本三冊をお送り頂いた。

私はその本にあるもの他に、手持ちの詩吟の本などからさがし出して十曲余りの琵琶曲をつくり楽しんで来たが、地方にいるために肝腎の先生方の琵琶を一度も聞いたことがなかったのである。

このレコードで初めて山崎先生の琵琶が、昭和三十七年から二十年近くもかかって完成されたものであることを知り、又琵琶は従来



島津天嶺

の琵琶の延長でなく、全く新しく創造された芸能であるとの認識を抱くに至った。そして琵琶人がもっと琵琶に関心を払い、この流行をはかるべきであると痛感した次第である。さて、御承知のように琵琶から出た詩吟は戦前、戦中を通じて、当時の軍国調の時流に乗って大発展をし、戦後も吟詠と衣を更えて、逸早く全国的組織を結成し、有力なスポンサーの後援の下に益々盛んになり、今では立派な邦楽になっているが、最近やマンネリズムに陥っているように感じられる。そしてその代りに琵琶が登場できるのではないかと私は思っている。

その理由のひとつは、吟詠は同じような漢詩を同じような節調で歌うので、何といても単調さを免れない、もともとのことは吟詠が入り易く吟詠人口が増える原因でもあるが、この利点は又弱点でもある。この弱点を補うために昨今は今様や歌謡曲や唱歌を中に

挿さむものさえて来てはいるが、私はここに琵琶歌と詩吟とを併せた琵琶を求めぬニーツがあるように思っている。
理由の第二としては、吟詠の伴奏は多く尺八、琴などであるが、最も適しているのは詩吟の母体である琵琶ではないかということ。
琵琶の先生方が何故吟詠の伴奏を引き受けなかったかと思うことさえある。

このように考えると、琵琶が今の吟詠にとって代り、新しい琵琶楽としてひとつの邦楽となり得る資格があると私は信じている。
なお琵琶も終局の理想は「弾き語り」であるが、歌絃分離、最初は先生の伴奏で歌い、「入り易くそして奥の深い邦楽」にしなければなるまい。
そこで問題は琵琶の私には琵琶吟詠とフルネームで呼ぶ方がよいと思っているが、如何に世間にPRするかということであるが、現在の社会に即した体制と方法を考えねばならぬ。紙数の関係で詳細は避けるが、組織としては全国的組織をつくること、これは吟詠界の現状を参考にしたらよいと思う。
又方法としては歌曲(山崎先生のレコードでは詩文となっている)の統一、公開など多くの問題があるが、喫緊のことはNHKの邦楽担当者！諸先生方は琵琶を通じてよく知っておられる筈である。吟詠や朗詠が邦楽として認められ、一ヶ月に三十分の放送時間を持つていならば、琵琶には少くとも同

じ資格はあると思う。以上いろいろ述べてきたが、要は琵琶吟詠を新邦楽に育てあげたいということである。琵琶楽が「琵琶の伴奏による歌曲」であるとするならば、現代に即した新琵琶楽が誕生することは当然であろう。そしてこのことは従来の琵琶楽の発展に寄与こそすれ、決して阻害するものではないと私は信じている。

おんなの都 (二)

郡 恵 一



小督の局 (2)

宮中第一の琴の名手小督の局は、中宮徳子に命じられて高倉上皇のお側へあがった。帝位を追われて上皇となったとはいえ、高倉院はまだ二十才を過ぎたばかりの若さである。しかも最愛の葵の前と愛別離苦の悲しみの直後のこととて、日夜悶々としていられる。その御前へ上った小督は琴の上手で、しかも宮廷第一の佳人であった。

中宮徳子は、夫の帝と小督がどうなっているのかをひとり冷静にながめている。自分の夫に側室を勤めるのだから、とても冷静でいられる筈はないけれども、帝の憂悶を見かねて敢えて美女小督をすすめた。現代女性には理

解しがたい心情であろうが、当時の女性たち特に貴族社界では寧ろ当然の心遣いとされてきた。

恋によって傷ついた心は、新しい恋によって医やされる。中宮徳子はそうした真理を心得切っていたらしく、宮中一の美人で琴の上手である小督の局を上皇の寵愛にまかせた。

一方、小督は冷泉隆房卿という恋人がありながら、主命によってその恋人と決別して上皇の寵姫となった。そこには何の理由もなければ真の愛情の芽ばえもなかった筈である。すまじき物は宮仕えという言葉がある。それは主命によって最愛の妻子を、或いはおのが生命をも捨てねばならぬ官人や武士たちの果敢ない身の上を云ったものだが、官女も貴人に仕える女たちも又同じ運命にあった。

人間がおのが生存を主張して、人間は皆同様であると胸を張って叫ぶことの出来る現代人から見たとき、古代の男女は誠に悲しい運命に置かれていたものと云ってよかろう。然しその時代の女性はそれが人間の定めと思つて、運命のいたづらとあきらめていた。

宮廷の官女といえは随分華やかな存在のように思えるが、主の命を拒むことは死を覚悟しなければならぬのだから、只命ぜられるままに琴をひき媚を呈さねばならない。死か、或いは服従か、常に絶対の場に臨まねばならぬ彼女たちは、十二単衣のきらびやかな衣装の下に果敢ない自分の生を隠していた。清盛の専横によって帝位を追われた高倉上

皇は、小督によって慰められ、次第に元気を回復し始めた。そして宮廷に於ては連日のように遊宴が催され、そこにはいつも小督の琴と

しかし遊宴の席に連なる冷泉隆房卿は、針の筵にすわっているような苦痛である。小督に対する愛恋の炎が消えさるどころか、一層激しく募ってくるばかりで、三年近くも思いを焦がしていた小督を、ようやく手に入れた喜びの頂点から、突然奈落の底へ叩き落とされたようなもので、君前とはいえ自分に目も呉れない。そこで思い切つて恨みの和歌を送つたけれど、小督はすげなくそれを送り返した。もともと隆房の執ような求愛を受け入れただけで、彼女自身は隆房を愛していた訳ではなかった。

それよりも小督は、一天万乗の身でありながら清盛のために帝位を追われ、葵の前とも別れねばならなかった高倉上皇に深い同情を寄せ、それが段々愛恋に変わって来た。

斯くして上皇と小督の愛が周囲の噂になり始めると、清盛は激しい怒りに燃えてきた。たかが宮仕えの官女でありながら、自分の婿二人を奪い取つた惜しい女！冷泉隆房の妻、高倉上皇の中宮徳子、共に清盛の愛娘であつて、小督は清盛の娘たちの良人を奪つた惜しい女性と映つたからである。

平家物語巻六によると、小督が高倉院の寵愛をほしいままにしていると伝え聞いた平清盛は、「小督があらん限りは世の中よかるま

じ、召し出(いだ)して失わん。」と、二人の婿の心を奪つた傾国の美女をなき者にしようとした。

この噂を耳にした小督は「わが身のことはいかでもありません。君の御為御心苦し。」といつて、ある夜ひそかに宮中を抜け出した。

小督蒸発、これは高倉上皇にとつて、葵の前の失を次に次ぐ愛の喪失であつた。その名を唇にのせただけで、もう胸苦しくなるほど恋しさが募ってくる。そして肝心の小督が姿を消してしまつたのでは、仲国の笛も一向に冴えはしない。琴の小督、笛の仲国、この両者が揃つてこそ楽しい遊宴も、既に色あせた。上皇の顔色は曇りゆく一方であつた。

小督が居なければ花も月も雪もない。果てしない憂愁に包まれて、上皇は閨路をさすらう盲馬の如き明け暮れであつた。

すると清盛は、それではお側に仕える女房たちも必要あるまいと云つて、中宮徳子をはじめ女房たちの奉仕を止めさせ、公卿たちの参内もはばんだので、只でさえ淋しい高倉院は、いよいよ佻しい境遇となつてしまつた。折りしも旧暦八月十五夜、君の歎きも知らぬげに、中秋の名月が天空にかかっている。「人やある、人やある。」上皇のお声に答える者もない。そこで仲国が参上すると、小督が嵯峨の里にわび住居をしているらしいので、何とかして探し出して欲しい、との院の言葉に仲国も当惑したが、ふと思いついたのは小督は琴の名手で、この名月に自分の佻しい身

を歎きつつ君の御事を思つて琴をかなでているのではあるまいか。

仲国は暫しの御暇を願つて御前を退出し、院の御文を懐中に馬寮の駿馬に打ち乗つて、嵯峨の里へと道を急いだ。(未完)



西南の役 和田越の決戦前後

辻 旭 城

日豊本線は九州の東海岸に添つて南下してゆく。このあたりは日向と総称され古い歴史をもつていた。「朝日たださす日向の国」と呼ばれていた。

まばゆいばかりに明かるいこの地が、古代の人々には住みよかつたのだろうか。

いま延岡地方には多くの古墳が散らばつていて、考古学者や歴史家たちを喜ばせている。延岡を真北へおよそ八キロ、天下に峻峻絶を以て鳴る可愛嶽(標高七二七米)が、峨々たる山容で天空に槍の如く聳え立っている。

そしてその中腹より、尾根が南へわかれて長尾山となり、更に東へ岐れて次第に低まりながら続く小尾根が、北川にさえぎられて絶壁をなすところ、標高僅か四〇米の峠が和田越である。峠の真下を通る国鉄日豊本線の車窓から見

都派琵琶秋の公演

日時 十月九日(午後五時開演)
会場 中央区日本橋室町三越前
第一証券ホール(二〇〇〇円)

主催 錦穂後援会
後援 日本琵琶楽協会・石田琵琶店

- 朗詠 天野穂扇 菅公 佐々木穂麗 城
- 山 阿伊染史門 白虎隊 伊東穂圭 本
- 能寺 深谷穂繁 勿来の関 高谷穂芳
- 扇の 佐々木穂紅 新撰組 丸田穂容
- 茨木 都穂鳳 曲垣平九郎 都穂苑 熊
- 谷蓮生坊 都錦穂 (以下来賓) 明烏お
- 吉 石井桑水 吹雪の敵 荒井姿水 鉢
- の木 輝錦統 俊寛 荒川洲帆 石田三
- 成 原島旭粧 伊那の曲 会主都錦穂

〒113 東京都文京区根津二ノ一五ノ二

都派琵琶本部
家元 都 錦穂

電話 821 五七〇八番

上げると、誠に平々凡々たる一小丘に過ぎないが、和田越の上に立つて俯瞰すると、この地形が如何に堅固な要害であるかが判然とする。薩軍が延岡の町を放棄し、この地に退いて最後の決戦を挑まんとしたのは、一は延岡城下を兵火から救わんとする配慮から出たに違

いないが、又一つにはこの地の險要をたのんで、六万の官軍を僅か三千五百の寡兵で激撃し、勝機をつかんで再び延岡を回復せんことを期したからであった。

官軍の延岡突入前、既に西郷隆盛は桐野、村田、別府、池上など新衛隊の四将に守られて延岡を去り、北川を遡って可愛嶽東麓の北川村首尾に逃避していた。そして明治十年八月十四日、延岡陥落の報に接した西郷は、その夜諸將を招致して軍議を開催、その席上で始めて自ら進んで発言し「明朝は余が先鋒を指揮して和田越で決戦しよう。」と云い出したため、驚いた諸將が必死に諫止したので、己むを得ずこれを思い止まった。

西郷は西南役の諸戦闘中、決して自ら戦場に望もうとはしなかったが、このたびの和田越の決戦のみは自ら初めて、弾丸飛雨の間に身を挺して戦場に臨んだのである。西郷としては茲が最後の死場所と考えたのであろう。薩軍三千五百はその夜のうちに、左記のような配置につき明朝の決戦に備えた。

▼中央正面和田越頂上総指揮官西郷隆盛。
▼同本部付桐野、村田、別府、池上の四将。
▼小梓守備熊本部長山崎定平(43)、同奇兵部隊長野村忍介(32)、同奇兵二番部隊長重久雄七(31)、同中津部隊長増田宋太郎(28)。
▼左翼方面薩本管長丘、神楽田陣地行進隊長相良五右衛門(31)、破竹隊長河野主一郎(32)、常山隊長平野正介(32)、

千城隊長阿多荘五郎(35)、鵬翼隊長新納精一(32)、正義隊長高城七之丞(31)、奇兵隊長伊東直二(38)、第二奇兵隊長佐藤三三(32)、飲肥隊長小倉勉平(32)、高鍋隊長秋月種事(34)。
▼右翼方面長尾山、可愛嶽方面戦闘雷撃隊長辺見十郎太(29)、振武隊長中島健彦(35)、熊本協同隊長野満長太郎(29)。
西郷が最後の意図を固めた八月十四日の同夜、征討参謀山泉中将も又旅団長を招致して軍略を練っていたのである。

維新の大坂

小林 章

徳川慶喜大坂城から蘭夜の脱出

慶応四年(一八六八)一月九日の夜明け、大坂の町に突然大砲の音が耳をつんざくように響き、まだお屠蘇気分が抜けきらない人々は、この轟音と共に目を覚ましてしまった。官軍の大砲が大坂城京橋口に撃ちこまれたのである。
その前日の深夜、鳥羽伏見の戦いに破れた前將軍徳川慶喜は、数人の重臣たちと、激しい北西の風で凍りつくような寒さの暗闇のなかをひそかに大坂城を抜け出し、開陽丸で江

戸へと退却していった。天下の將軍がその權威をほしのままにした直轄領大坂から、見送る人もなくみじめな蘭夜の脱出である。
混乱に乗じて城に乱入した者によって城の金品は持ち去られ、本丸から出た火は城内に燃えひろがり、大坂城は僅かの矢倉と大手門を残すだけの無惨な姿になり果ててしまった。町内も家財を持って逃げまどう者など混乱状態を呈する。大坂城の炎は古き時代を焼きつくし、町々で打ちならされる鐘の音は、新しい時代を告げる響きであった。

幻に終わった大坂遷都

いまだ人心が動揺している一月下旬、天皇の政府は本願寺津村別院(東区北御堂の名で親しまれている)に大阪鎮台をおき、間もなくこれを大阪裁判所と改めて、主として旧幕府直轄地を管轄することとなった。五月にはこれが大阪府として発足するが、高槻、狭山、岸和田の大名領などは引続きもとの領主の支配という形がとられた。
新政府で遷都の議がもちあがったとき、大久保利通は「かつて天下の台所として栄え、海に望んだ大坂の地は都として最適の地である」と大阪遷都を唱えた。三月に明治天皇の大坂行幸に先立ち、政府は鴻池善右衛門らに多額の御用金の申し付けをした。その時彼等は「大阪に遷都されれば今の献金は何倍にもなって返ってくる」として献金を差し出すなど、大阪の人々は天皇の大坂行幸を遷都の前



ぶれと信じて喜んだ。これに対して前島密は「浪華は帝都としなくても繁栄するが、江戸はそうではない」と反論したこともあって大坂遷都はならず、天皇は滞阪四十日余りして京都へ還幸、同年九月の東京行幸となった。ここに大阪遷都は幻のうちに終わったのである。(慶応四年は九月に明治と改元された。本稿の月日はすべて旧暦による。)



琵琶歌中の詩吟・和歌朗詠考(二)

編集部

(琵琶歌) 泊天草洋 頼山陽
雲那山那吳那越 水天髯髯青一髪
萬里泊舟天草洋 煙横蓬窗日漸没
瞥見大魚躍波間 大白當船明似月
くもかやまかごかえつか すいてんほう
ふつせいいつぱつ ばんりふねをはくす
あまくさのなだ けむりはほうきうによ
こたわってひようやくぼつす べっけん
すたいぎよのはかんにおどるを たいは
くふねにあたってつきよりもあきらかなり。
(大意) 向うに見えるのは雲か山か、それとも対岸の中国呉の地か越の地か。水と空とがさながら青い髪の毛を張ったように一線を

画して連なっている。はるばる京都から万里もあるこの天草洋に来て今宵船じまりをすれば、折から夕靄が静かに小舟の窓をこめて太陽は次第に西の海に沈んでゆく。突然大きな魚が波間にはねるのを見た。見上げる空には早くも宵の明星が輝いており船の正面に当って、まるで月のように見える。

(琵琶歌) 山内一豊の妻

山内一豊夫人 工藤武城
婦徳豈要紅紛施 心中貞節勝嬌姿
荆釵理髮避粧飾 綿服喪身凌馮飢
切々杼機常惜隙 管々針線不知疲
誰知鏡匣十金貯 遂作土州城主基
ふとくあにようせんや こうふんをほど
こすを、しんちうのていせつは、きよう
しにまさる、けいさかみをととのえ
うしよくをさけ、めんぶくみをつつみ
かつきをしのぐ、せつせつちよき つね
にすきをおしめ、えいせいしんせん
かれをしらず、たれかしらん きようこ
う十きんのたくわえ、ついになす どし
うじようしゆのもと。



昭和五十六年度文化庁芸術祭参加公演 第二回 水藤五朗 琵琶演奏会

とき 十一月四日(水)六時半開演
ところ 日本橋三越前第一証券ホール
入場料 二、〇〇〇円
主催 錦琵琶本部

- 一、勸進帳(掛合い・問答入り)
山下晴楓 岩崎竜風 田中光水
森中志水 (絃) 水藤五朗(鼓)
藤舎華風 (笛) 望月太八
- 一、恵林寺炎上(独奏)
水藤五朗 (尺八) 川村泰山
- 一、羽衣(合奏)
水藤五朗 木原綾子 水藤桜子
藤巻旭彰 (琴) 関口歌悦 (尺八)
川村泰山 (鼓) 藤舎華風

〒176 東京都練馬区旭町
三一二二一四
錦琵琶本部
水藤五朗
電話(930)四四九八番



家康遺訓ほとんど偽作？

海舟らの作か

「人の一生は重荷を負って遠き道を行くが如し……」の書き出しで知られる徳川家康の遺訓をはじめ、家康文書七十二点が実は偽作の疑いが濃い、という研究が徳川御三家の一つ尾張徳川家の二十一代目、名古屋・徳川美術館の徳川義宣館長(47)の手でまとまった。

(中略)同館長は家康研究の第一人者であった故中村孝也元東大教授のあとを継ぎ、家康文書の資料収集や解明にあたってきた。その結果、偽作の可能性が強い、と指摘されたのは慶長八年(一六〇三)正月、家康が残した遺訓。「人生急がず、困った時のことを思い出し、しんぼうが大事」などと、人生の機微をとらえた処世訓。家康文書の代表作とされ、名古屋のほか、久能山、日光など各地の東照宮に計五点ある。これまでも「家康自筆ではないらしい」というのは、専門家の間での「常識」になっていたという。

同館長の研究は、遺訓の文体や内容にまで踏み込み、①説教する相手を特定せず一般的、②文書も道徳的すぎる、などの点で「自筆でないのは明らか。家康の生の言葉でもあ

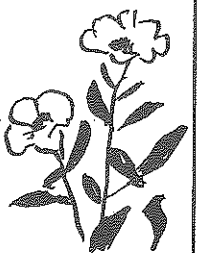
い。生存中に書かれた可能性はまずない」という。さらに、この遺訓のほかに、書跡と和歌、家康の手判など計七十二点が偽作の疑いが強く、中には真正文書として公開されているものも多いという。

同館長はこれらの偽作の「犯人」は勝海舟や山岡鉄舟らの幕臣グループとみる。偽作の目的などについては、今のところ明らかにしていないが、「いろんな角度の推論からたどりついた。はば間違いない。(中略)」と話している。

また晩年の家康が戦死者の供養のため毎日、「南無阿弥陀仏」の六字を書きつづけたといわれる「日課念仏」についても疑問を投げかけている。この「念仏」は各地の美術館や社寺などに百点以上残っていると推定され、うち二十一点は重要美術品として、歴史や美術関係者には家康自筆と信じられているという。今回の、いわば身内からの家康文書「告発」について、同館長は「字問以前に東照宮の信仰にもかかわる問題なので、公になりにくかったようだ。私の場合は、身内であるがゆえに責任を感じて、公表に踏み切った」と話している。研究を単行本にまとめ、今秋にも発行の予定、という。(朝日新聞所載)。

岡部錦蝶女史

九月一日(火)午前八時半NHK教育テレビ「お達者くらぶ」の時間に薩摩琵琶岡部錦蝶女史が「白虎隊」の一節を放映されたが、発声明瞭、弾法も正確で九十三歳の高齢者とは思えない元気に視聴者は驚愕敬服した。また息女大阪の伊勢谷安江女史に琵琶の稽古をつけて居られる場面も同時に放映された。これは八月二十九日NHKの記者・写真班が所沢市の岡部女史宅を訪れ、琵琶に関する話をしながら録画したもので、翌九月二日午後五時同テレビでも再放映された。



金田一春彦先生の「私の音楽談議」

八月二十四日(月)から同二十八日(金)までの五日間NHK・FMラジオで首記が放送され、児童歌曲から始まって邦楽についての色々の談があり、最終日の二十八日には琵琶に関する講義と故田中旭嶺女史の録音「耳なし芳一」

の演奏も加えて我々同志には勿論、一般の参考にも供された。

筑前琵琶ひよっこコンサート

八月二十五日(火)午前十時半大阪東区本町津村別院、大阪旭香会・京都三美会共催、山崎旭萃会後援。(第一部)千代の春・旭香会員、筆佐野都志江・淀君・伊藤繁子・絃旭香・君ヶ代・林那加・伽羅の兜・青木一江・絃旭美津・本能寺・小橋肇・那須与市・佐々木洋子・北條時宗・菅旭耀・禅師と正宗・斎藤旭見・戦艦大和・篠原旭洋・羅生門・片山旭星・青葉の笛・宮田旭鶴・絃旭美津・曾我兄弟・土田光樹・青葉の笛・西村旭富・鴨川の露・細川旭穂・耳なし芳一・角田旭優、谷口旭笑、絃旭香・大楠公一・坊寺旭清・曲垣平九郎・吉田旭礼・壇の浦悲曲・旭香会長菅旭香・川中島・渡島旭鷲・挨拶・山崎旭萃・花束贈呈

田中鵬水・西郷隆盛・三美会長矢吹旭美津・戦艦大和・林旭竜。

(八月十四日朝日新聞夕刊)おけいこととで筑前琵琶を習うこともがふえて来た。最近、演奏アルバム第二集を出した日本橋会宗範山崎旭萃一門の大阪旭香会・京都琵琶三美会でも年若い弟子が年々増加し、二十五日には大阪北御堂の津村ホールで、初の合同演奏会を開く、名づけて「ひよっこコンサート」。午前十時開演の第一部で先輩たちが演奏したあと、午後二時過ぎからの第二部では七組の少年少女がバチを競う。なかでも五才と六才の少女が共演する「赤垣源蔵」など、ものにかなりそうだ。今後とも開催するという。無料。(原文のまま)。

京都琵琶協会八月例会

八月三十日(日)午後二時会員梅原旭壽女史宅。三十五度の残暑で戸外は厳しかったがクーラーのよく利いた二階大広間の畳座敷に平井春嶺、水内煖水、木下皇水、桜井旭富、山岡旭清、安住旭康、梅原旭壽、田中敷水、林旭朋、馬場鴨水、高橋正雄、佐藤美代子、植村寛水の諸氏出席。芸談、雑談に続いて茨木・桜井の語津の露・梅原・元寇・平井・道成寺・田中・竜の口・木下・常陸丸・水内・無常・植村・石童丸(前)馬場各氏研修のあとビールで

乾盃、夕食を共にし「石童丸」の謡い廻しや隠し芸など楽しい一日を過ごして七時散会した。

木原綾子一門のゆかたざり

八月三十日(日)正午千葉駅前料亭「小沢」に於て一門の外宮崎直二、山崎錦幽外教氏の来賓を迎えて開催。実朝公・浅田徳芳・盛綱先陣・木原綾子・母常盤・長岡初江・吉野徳古・加藤観水・五條橋・田島誼子・一寸法師・斎藤満喜・羅生門・内田旭章・武蔵野・遠藤鶴東・耳なし芳一・会主木原綾子。外に詩吟詩舞等数番のあと小宴、五時半散会した。

蓮水会・一水会神戸支部八月例会

八月三十日(日)午後二時西宮市蓮水会長宅、三浦蓮水、安田明浩、三浦博、高原柳水、田中珠水、小池田鶴子、楊光子、木ノ宮梅水、吉田秋水、川上琵琶の各氏出席。詩吟蓮水会歌を一同合吟の外母常盤・高原・湖水乗切・田中・大和懐古・木ノ宮、吉田・日蓮誕生・川上・屋島懐古・三浦。なお詩吟一題を吉田春鳳、三浦桜泉合吟の外詩吟十一題研修。

近県親善錦心流琵琶演奏会

九月六日(日)十二時半秋田市協働社大町ビルホール、一水会秋田支部・秋田琵琶連盟共催、県芸術文化協会ほか後援。第十九回親善演奏会で一水会秋田支部主軸となり新瀉、酒田、鶴岡各地代表の外東京一水会本部役員松岡遊